慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済的史観論の価値（三）
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1919
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.13, No.7 (1919. 7) ,p.873(71)- 885(83)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19190701-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の度を甚しくするものである。此の如き行爲は實に安泰を危險に、防禦を攻擊に、保護を强襲に變せしむるものである。加之、此の如き行爲は激烈に抵抗する力なき小弱國の獨立を全然否認するものである。抵抗を敢てする國民の生命に對する攻擊であつて、又其の存在を危くする攻擊である。然も抵抗が試みられたる前、攻擊者は惡魔の誘惑を以て、名譽の犧牲に對して、物質的辨償を申出でたのである。國際法の違反は此の如くして、國際的權利の根本原理たる國家の獨立に對する攻擊の罪を一層加へたのである。此の如くして、故意に且之に對し責任ある人々の行爲を辯護する能はざる目的の爲、高壓的暴行は國際的約束に對して加へられたのである。

報告書は斯く遂行せられたる罪惡に對し、其の正當なる恐の念を表明したる後、冷靜に歸りて尙ほ語を續けて曰く、

然るにも拘はらず、本委員會は責任ある當局者即ち個人（而して殊に前獨帝）に對し上の如き中立違反てふ特別の項目に就て刑法上の罪を糺すことを爲す能はずとの意見である。然し乍ら本委員會は國際法並びに國際間の信用に對する是等の甚だしき暴行を以て、平和會議が公然たる罪の宣言の主題たらしむ可き事を思考する程に是等の罪惡を重大視するのである。

最後に報告書は開戰責任者並びに中立違反の行爲に對して特別の方策或は特別の機關を設く可き事、將來かゝる重大なる國際法違反に對して刑罰を規定す可き事を平和會議に提唱して居る。尙ほ戰爭の法規及び慣習並びに人道の法則に違反したる犯罪、前記三十二ヶ條以外の犯罪を處罰せむが爲、可成交戰國の協同に成る高等裁判所の設置を主張して居る（完）。

經濟的史觀論の價値（三）

野村兼太郎

四

自己を中心とする各個人が家族國家等の形式に依つて他の個人と結合さるゝは、すでに前節に述べたるが如く、利己より生じたる便宜上の成果なれども、各個人を斯く結合するに至らしめたる原因は是を二個の愛着に歸するとを得べし。そは前述せるが如く(一)生物的愛着と(二)理解の愛着となり。生物的愛着と云ふはすべての動物の有する無意識的結合の感情にして理解の愛着とは之に反して意識的に相愛着するものなり。前者の生物的なるに對して後者は稍々嚴密ならざる意味に於て精神的と稱するを得べし。素より斯如き區別の限界は嚴格に是を確定することは極めて容易ならざれども、吾人が世界の生活現象を眺むる時、そこに何等かの相違の存するが如く思考し得ざるにあらず。然らば先づ斯如き生物的感情の限界を何處に求むべきや。

實に吾人をして靈妙不測の驚嘆の聲を發せざるを得ざらしむるものは此の世界に於ける數々の生活現象なり。見よ、人跡絕えたる深谷の百合にも妖麗なる裝を與へ、明日をも待たぬ朝顏の花にも可憐の姿を現せしむ。而もすべての生活個體が或は互に相食み相爭ふにも拘らず、そこに一道の調和を生じ、各々其の生活を繼續せんとする有樣は、人智を以て測るべからざる神秘の境なり。科學の力は或は彼等の素成分を分解し、其の個體發生の道程を明瞭にすることを得べし。其の「何もの」たるかに對しては不十分乍らも何等かの解釋を下すことを得べし、されど其の「何故」たるかに對しては遂に何等の解答

をも得ざるなり。或は宗教的神秘の雲に韜晦せざるを得ず。斯如き生物界の不可知の行動に對して、而も吾人々類自身の行動の不可解の部分に對して、吾人は是を本能と呼ぶ。「かゝる故に」なすにあらずして、しかせざるを得ざりし故にしかするなり。其處に何等理性的判斷は存せざるなり。人類以外の殆どすべての生物は斯如き力の下にのみ其の生活現象を繼續するなり。勿論ショペンハウエル Arthur Schopenhauer の如く、人類の自由意思を否定し去つて、すべて天地萬物の現象は盡く一の意思 Wille の發現に外ならず、而も斯如き意思は盲目的にして求めて飽くことを知らざるものなりとせば、人類の行動と雖も是亦本能に過ぎず。鳥の巣蜘蛛の網が睿知の所産にあらずして豫見なき本能の所産なるが如く、電燈も飛行機もそは人類睿知の所産にあらずして其の本能の成果に過ぎず。果して然るか。余は人類文化の發展に對して一の目的觀を抱き、自由意思の發現と見るが故に、俄にショペンハウエルの所說に首肯し得ざるものなり。斯如き人類生活の動機に於ける二個の對立——本能と自由意思との對立に對して、嚴密なる區別をなすことを得ず。然乍ら吾人が本節の劈頭に陳べたる二個の愛着の對立は、恰も此の對立と氣脈相通ずるあるものゝ存するにあらずや。即ち本能に依る生活は全生物に共通なる無意識的結合の生活なり。自由意思の生活は略々人類特有なる理解的意識的の生活なり、吾人々類の生活は常に此の兩者に依りて左右さる。從つて吾人の歷史も亦此の兩者に依りて支配さる。すでに前述せるが如く本節に於ては先づ前者——本能的生活を論究して經濟的史觀論の一限界を發見せんと欲す。

如何なる程度迄を目して本能なりと稱するやの問題はすでに云へるが如く困難なる問題なり「ツエルツエリス」と稱する蜂の如き蟲は自己の卵を、孵りたる後其の餌となるべき蟲の體內に產む、而も其の蟲の腐敗を恐れて單に運動神經の中樞を刺して、其の身體を痲痺さするに過ぎずと云ふ。然乍ら斯如き行爲は假令如何に巧妙に行はるゝとするも本能的行動に過ぎず。又小魚の一種「スチツヒリング」の雄は雌の產卵期になるや水草を以つて巣を造り雌をして產卵せしめたる後、卵の上に精液を注ぎ受精させ、卵の上に坐して、鰭を動かし、新鮮なる水と交換せしめ卵を孵すことに些かも注意を怠らずと云ふ。更に其の子を口中に呑みて、敵からの危險を防禦すると云ふ「パーテル、フアミリアス」と稱する魚の如き[1]、恰も人類に於ける親の愛若しくは家族的愛情に彷彿たり。然乍ら斯如きはすべて何等意思の發動せるものにあらず、本能に基く必然的行動のみ。人類の血族的愛情、創作的欲望の一部も亦斯如き本能的行動の發展に過ぎず。

斯如き本能的行動に依る人類の生活は、換言すれば衝動 Trieb を中心とするものに外ならず強き感情の感覺若しくは表象に依つて、何等反省することなく、一定の目的意識 Zweckbewusstsein をも有せず、ある欲望を滿足せんと、又は不愉快を避け、愉快を獲得せんとする意志刺激 Willensimpuls[2] に依る生活なり。そは或は原始的反射作用として、或は個々の經驗的に得たる習性として、各個體が其の生活に對する適合性 Zweckmässigkeit たるなり。斯如き衝動的行動が如何に吾人々類の歷史に重大なる影響を與ふるかは、恐らく吾人の想像する以上なるべし。異性相求むるの情は、そが不具にあらざる以上、冷靜なる個性判斷以上に出ずること少なからざるべく、認識欲 Desire for distinction の强烈

なることは華美なる衣服、高價なる裝飾品が市場に於て甚だ多く賣買せらるゝに依つても、是を察することを得べし。吾人が市場にて物品を購入する際に、其の判斷を決定するは、常に必ずしも其の物品の效用と自己の欲望程度とを一々比較考慮して決定するにあらず。斯如きは單に一個人の場合にのみ限るべからず、國際間若しくは階級間に於ても同樣なり。殊に多人數群集せる場合の如き、平常冷靜物を考慮するを以つて誇とする者すら、彼自身の判斷力を喪失して、群集に從つて盲動するは、勿論群集的心理の特殊なる場合なりと雖も、是亦人類の本能的行動の一にして、群集的衝動に從つて動作するものと云ふべし。斯如き本能的行動の原因を探れば、或は心理學上若しくは生物學上、ある程度迄是を發見し得べし。例へばある相應の資產を有する婦人がある大商店にて萬引をしたりとせんか、彼女は其の物品を購入せんと欲すれば充分に購入し得る資產を有す、然るに尙ほ是を盜めり。其の原因を探る時は、或は强烈なる所有本能に驅られたりと見るを得べく、或は冒險的本能――盜むも尙ほ發見せられずと云ふ興味よりなしたりとも云ふを得べく、尙ほ亦彼女の精神的異常にも歸するを得べし。斯如き原因の探索はある程度迄其の眞實を語り、實際上有益なるべしと雖も、如何なる程度迄其の眞實性を明瞭になし得るやは疑問なりとす。殊に斯くある出來事 Geschehen の原因の探究はこゝに歷史的因果關係に關する興味ある問題を惹起す。

ある最初の事實は常に如何なる場所に於てもある他の事實を惹起すとせば、是等兩者間に因果關係ありと斷定するは何人も異論なかるべし然乍ら若し最初の事實と同一時間に同一場所に於て他の事實がそれと一所に惹起せば、後の事實は少くとも純粹には外的に分明ならず。然るに事實此宇宙の諸現象は多種多樣なる原因結果が錯雜して生じたるものなり。今ある複雜なる總合現象Aと云ふ狀態がZと云ふ狀態に變化したりとせよ、而してAはabc、Zはxyzの諸現象よりなると假定せんに、若し吾人が他の總合現象A^1がZ^1なる現象に變化せる際、其の素成現象を見るにA^1はacdにしてZ^1はuvzなりとせんか、吾人はaとzとの間に特殊の因果關係を認むるに至るべし。[3] 斯してすべての諸現象を觀察してこゝに法則を發見せんとする努力は果して如何なる程度迄可能なりや。複雜多樣の社會現象と歷史的法則との問題如何に就ては共に第四の歷史的法則の問題と經濟的史觀論との關係を論ずる際に讓つて、こゝには單に問題を提起するに止むべし。

再び本能の問題に歸る。今斯如き人類の本能的行動の種類をジェームスが其の著「心理學原理」Principle of Psychology に擧ぐる所に依つて見るに、氏はプライエル、Preyer シュナイデル Schneider 兩氏の研究に基き左の如きものを算へたり。即ち(1)吸入、嚙む、齒ぎしり、舐む顏をしかむ、唾す。(2)手を打つ、遠き物體を指示す、欲望を聲にして表示す、sound expressive of desire (3)物體を口に運ぶ、(4)泣く、笑ふ。(5)顏を側に向ける。(6)頭を直立す。Holding head erect.(7)坐る。(8)立つ。(9)移動 Locomotion.(10)發音、(11)摸倣、(12)競爭、敵意(13)喧嘩ずき、怒り、怨み、(14)同情、(15)狩獵性 The hunting instinct. (16)恐れ、(17)擅有 Appropriation.獲得。(18)盜心狂 Kleptomania.(19)建設性 Constructiveness.(20)遊戲、(21)好奇心。(22)社交性及び內氣 Shyness. (23)隱匿性 Secretiveness.(24)清潔、(25)謙遜 Modesty. 羞恥(26)

嫉妬(27)戀愛、(28)親の愛 Parental Love. 等なり。[4] 而して氏は一々是等を詳細に說明したる後本能の起源 origin に關してリュイス Lewes. ラマルク Lamarck ダーウイン Dawin ワイヅマン Weismann 諸氏の研究を紹介せり。[5] 然乍らこゝに是等の諸說を記述すべき必要を見ず。よしそれが睿智喪失說 Theory of lapsed intelligence. たると、反射說 Reflex Theory たると、若しくは自然淘汰說 Natural Selection Theory たるとを論せず、斯如き本能を獲得せることはそれが「各々特に完全な形に創造されたるか、或は次第に發展したるか」[6] その何れたるを問はず、吾人が自己を主張し、若しくは自己を維持する上に、最も好都合なるものなることを知れば足れり。上述せるジェームスの擧げたる多種なる本能を見れば、如何にそれ等が自己の生命を持續するに便なるかを知り得べし。幼時母乳を吸入する技巧はよく自己を成長せしむる第一階梯たるべく、模倣の本能は已が生活をして改善せしむべく、恐怖、憤怒の性情は自己の生命の敵に對する必然的發露たるべし。即ち吾人は是等本能の根本に生きんとする本能の存在することを知る。生存せんとする欲求は、宗教的哲學的には何等かの意義を附すること必ずしも難きにあらざれども、斯如きは少數者のみよく理解し得る所、普通一般の人間にとりては生存するが故に生存するのみ、何が故に生存するかは彼等にとりて當面の問題にあらず。斯如き生存欲はすべての人類に生存せんとする事實の持續に對して最後の而して最善の努力を盡さしむ。アントン、メンガー等の主張する生存權の理論的根據が如何なる學理に基くとするも、吾人は其の根本に斯如き生存せんと欲する本能的欲望の充足を必然的に要求するものなることを知る。而してあらゆる他の本能を超越して、且つ其の根本として生きんとする本能は強力に吾人の行動を支配す。生存欲の必然的反面たる死に對する恐怖は如何に其の本能の強きかを語るべし。斯如き生存欲求の結果として人類否あらゆる生物は物質上に於ける最低生存 Minimumexistenz を要求す。斯如き強度の要求は其の歷史上極めて甚大なる影響を與ふること論なし。此の點に於て歷史上に於ける經濟的重要は認むべく、人類文化に關する經濟的說明が心理學的に一の基礎を有すと云ふを得べし。

然乍ら事實上吾人が物質上の最低生存に滿足し能はざるは、他に更に物を獲得占有せんとする本能の存するが故なり。斯如き本能は其の他の本能と相待つて何が人類の最小要求の欲望 minder dringende Bedürfnisse なるか、其の限界を分明ならざらしむるものなり。斯如き難問をこゝに解釋せんと欲するにあらず、唯斯如き占有獲得の本能は殊に近世經濟組織に於て、著しく重要の程度を增加せり。そは現代吾人の有する所有本能は其の目的物を貨幣てふ形態物に求むるが故なり。然るに其の貨幣たるや單に吾人の生活維持に必要なる物的財をのみ購入し得るに止らず。精神的所產をも貨幣に換算せんとする傾向あり。斯如くして貨幣は一見凡そ如何なるものなりとも是と交換し得ざるものなきが如し。故に經濟的なる語を貨幣に稱量し得るものてふ意味なりとする時は經濟的史觀論てふ意義は稍々廣義に解釋せらるゝ恐れあり。現代經濟組織に於ける最も有利有益なる機關たる貨幣は、吾人に多くの興味ある而も難しき問題を提供す。然乍らこゝには物質を所有獲得せんと欲する本能が、外見は單に貨幣と稱する一物質獲得の形式に現るゝに拘らず、其の內容に於ては

更に一層廣汎なるものをも含むことを知り、依つて以つて經濟的史觀論の意義を餘りに擴張し誇大に解釋せざるやう注意せば足れり。

次に一言せざるべからざる事は、斯如き所有獲得の本能は又こゝに一の經濟的爭鬪を喚起することなり。即ち生きんとする本能は自己保存の發露なり。占有獲得の本能は其の根本を自己保存に發すと雖も、其の限界を脱する時は自己主張の要求たり。自己を主張せんとする各個體は、こゝに最も原始的なる爭鬪を開始せざるを得ず。

更にマシュースが經濟的史觀論に反對の要素なりと云へる親の慈悲、冒險、名譽、遊戯、光榮等の感情、及び藝術的衝動は物質的欲望以外の本能の發露に外ならず、然乍ら此等本能の根本を見る時は、すでに前述せるが如く自己保存と自己主張とに歸することを得べし。親の子を愛するは一見自己保存を否定するが如しと雖も、自己の永續を希望する本能より見れば、それは性慾的本能と共に一種の自己保存と見るを得べし。況んや眞に子の爲めになる理解を缺ける愛情の如き、或は又自己の生活のために其の子を棄つる者のあるに於ては必ずしも眞に子のためにのみ子を愛するものと云ふを得ず。名譽心、冒險心の如きは一に自己を認識せられんことを欲求するものにして、自己主張の一形態に外ならず。

然乍ら斯如きはこゝの問題にあらず、唯物質的以外の是等の本能が如何なる影響を文化に及ぼすや、吾人の經濟的行爲に如何なる限界を提供するやにあり。そは明に經濟的史觀論に對する一限界たり。

すでに述べたる如く、吾人の行動は必ずしも經濟的理論に基きて行はるゝにあらず。ある物品を購入する際に、其の判斷を下すには其の時に於ける本能的衝動の力預つて力あり。現今の如き物價騰貴の際に於ても尙ほ化粧品、裝飾品等は物の品質よりも寧ろ高價なればなる程賣行良好なるが如き事實は、恰もよく人類の本能的行動の如何に有力なるかを語つて餘りありと云ふべし。尙ほ亦冒險のために身命を損じ、名譽のために生命を棄つる行爲は、少くとも生命の持續を根底とする經濟的見地よりしては解釋すべからざるものたり。

ラブリオラは歴史は其の全體を包括せざるべからず、且亦其の內心と外皮と the kernel and the husk は一つであると云ふ事實より次の三つを結論せり。（第一）に歴史的社會的定命主義 historico-social determinism に於ける原因と結果との關係は個人心理學の主觀的定命主義 the subjective determinism に於ては明瞭ならざれども、形式的抽象的哲學に於ては、決定的動機 motive なくして欲求 wish なきが故に、各意志 every volition に就て動機を發見すること難きにあらず。然乍ら斯如き動機及び欲求の下に兩者の原由 genesis あり。斯如き原由は一方當時の社會狀態より發生し、他方古代より遺傳せる有機的性質 organic disposition の內に陰されたるものなり。斯如きは即ち歴史的定命主義なるものにして、其の宗教的、政治的、美的、感情的の動機の根本に物質的條件の橫はることを看過すべからず。斯如き條件の研究に吾人は唯其の原因の何たるかを論ずるに止らず、如何なるものに依つて其の起原が不明なるにも拘らず動機として意識に現るゝ形をとるに至りしかを研究せざるべからず。（第二）にすべての複雜なる歴史的現象を經濟的範疇に歸せしむるにあらずして、すべての歴史的事實を、分解、類別、接合、

建設等を必要とする「根本的經濟的組織の助けを以て、」by means of the underlying economic structure.（マルクス）「最後の分析」last analysis（エンゲルス）に於て説明せんとするなり。此の結果として、（第三）に根本的經濟的組織より全體の歴史を描寫せんには社會心理學 social psychology（適當の名稱にあらず）の智識を必要とす。勿論個人的意識を否定し去つて社會的精神 social psyche の想像的存在を説くにあらず。斯如きは單なる神秘主義に過ぎず。斯如き社會心理學は其の性質として常に偶然的 circumstantial なれど、所謂人類智識の抽象的一般的過程を云ふにあらずして、常に特別なる狀態の下の特別なる構造 a specified formation を云ふなり。以上これを要するに人類を決定する意識の形式を論ずるにあらずして、其の意識を決定する人類の狀態を云はんと欲するなり。

然し斯如き意識の形式は人生の條件に依つて決定さるゝも、それ自身に於て亦歴史の一部を形成す。こは單に經濟的分解に存するのみならず、すべての他の分析の結合に存す。換言すれば歴史上根本的經濟組織に依らざる事實はなけれども、又そが迷信的たると、實驗的たると衝動的たると、反省的たると、果た又空想的たると理論的たるとを問はず、決定されし意識形式を同時に或はそれと前後して伴はざる事實なし(6)

吾人は歴史的定命主義に關しては後に説くの必要あれば、こゝには深く觸るゝの必要を認めず。唯ラブリオラの云ふ斯如き意識と稱するものゝ内に衝動的に働く一の力として、本能的行動の存し、時に經濟的理論に反する行動をなすことを認め得れば足れり。而して斯如き意識の他の半面として、本能に對して經濟的定命主義を否定せんとするものは、自由意思の判斷なりとす。斯如き理性的判斷作用は人類をして他の動物と異ならしむる唯一のものにして、唯人類によく自由意思の存在するに依りてのみ可能なるものなり。人類の道德も文化も唯此の點よりのみ派出す。換言すれば自然的本能的要求に基く欲望價値 Bedürfniswert の外に理想的自由意思的要求に基く理性價値 Vernunftwert の意識存するなり。

吾人々類の歴史の根本的要素とも見るべきものは、すでに述べたる本能對自由意思の兩者なり。經濟的史觀論は斯如き要素の前者に於て最も强烈なる生存的本能及び最も重大なる占有本能を根本とするが故に、本能的衝動の動機を自然科學的に追求して、そこに因果關係を發見し、經濟的定命主義に到達すること必ずしも難事にあらず。然乍ら非經濟的本能は暫く置き、吾人の經濟的行動は盡く斯如き本能的生存欲にのみ左右さるゝものなりや。換言すれば經濟的史觀論は本能的衝動生活をのみ關係し、理性的自由意思の生活には何等關與することなきや。

經濟的文化の發展は單に吾人の生存慾の充足のみを以て滿足するものにあらず。勿論無限なる所有慾の充足に對しては殆ど其の滿足は不可能なりと雖も、かゝる所有慾を無視するとも尚ほ吾人の精神的力作を可能ならしむべき物質的文化の必要なること論を待たず。斯如きは物質的文化の精神的文化に必要なる所以なれども、物質的文化を經營發展せしむるにも、單に本能的衝動のみに依るにあらずして、理性的判斷考慮を待つこと極めて大なり。斯如きは寧ろ近世産業組織の特徴にして、マーシャルは是に名付くるに熟慮的 deliberateness なる名稱を以つてせり。(7)「經濟學に於て特に研究する人生の一面は人の行動が最も熟慮的なる一面にして、又人が

特定の行爲を始むる前に其の行爲の利害を打算すること最も頻繁に行はるゝ一面なり。而して此の一面たる、人が風俗慣習に從ひ特別に合理的打算を試みずして行爲せる場合に於ては、其の風俗慣習自體が既に種々の行動を綿密仔細に考査せる結果より生じたるものなりと確言して粗ぼ誤らざる人生の方面たるなり。[8]」即ち生存的本能はこゝに於ては其の衝動性を脱却して、冷靜なる理性的判斷の範圍に入らんとす。而も尙ほ其の原因結果を考慮する結果、こゝに一の自然科學的因果關係を想像せしむ。されどこは暫く後節に讓り、生存的本能を脱却せし經濟的考慮は經濟的史觀論の一原理たる社會の產業組織變更に如何なる影響を及ぼすかを見ん。

生存的本能にのみに基く產業組織の變更ありとせば、そは恐らく一の群集的運動たるべく、流血の悲慘事は論ずる迄もなく、恰もかの荒野に餌を爭ふ餓虎の爭鬪に遠からざるべし。然乍ら理性的判斷に基く產業組織の革新は、そが群集心理に支配されて本能的衝動に陷入らざる限り、ベルンスタインの云へるが如く、「爆發的破壞 a catastrophic crash による可能よりも確實なる漸進 a steady advance の中に、永續的效果のために、for lasting success より遙かに安全なる」[9]手段を採るに至るべし。

斯如き產業組織の變更は常に必然的傾向を有すること、而してこゝに――若し其の產業組織に不平等なる階級の存するとせば――階級爭鬪を喚起することは、恰も一の法則の存するが如し。斯如きは經濟的文化發展の一過程にして、其の法則性 Gesetzlichkeit に關しては節を改めて說明すべし。

以上述べ來れるが如く、經濟的史觀論は吾人の本能的衝動生活を論ずるに當つては、其の最も强度なる本能的衝動たる生きんとする慾求の根本に立脚し、加ふるに物的占有の本能に依れるが故に、歷史觀として、他の如何なるものよりも有力なるは論なし。其の本能的衝動より生存慾と所有慾とを除かば、吾人の本能的生活は極めて薄弱微力なるものなり。此の兩種の本能に依りてのみ、よく自己保存を繼續し得るなり。こゝに於て吾人は以下人類生活の他の一面たる理性的自由意思の生活に於ける經濟的史觀論の地位を明瞭ならしめざるべからず。然乍らそれに先立つて、經濟的史觀論と社會主義との關係を極めて簡單に一瞥し、つゞいて歷史的法則の一般的考察を終へ、これが經濟史觀論との關係並に其の定命主義に就て論じたる後、最終の問題として、是が精神的史觀論と如何なる交涉を有するやに就て、理性的自由意思の生活の立場よりして、經濟的史觀論の限界に就て論ぜんと欲す。

（註一）永井潛氏「生物學と哲學との境」八六―八八頁。
（註二）Eisler:―“Wörterbuch der phylosophischen Begriff.” Dritte Auflage.
（註三）G. Simmel:―“Probleme der Geschichtsphilosophie.” s. 75f.
（註四）W. James:―“Principle of Psychology.” vol II pp. 404-441.
（註五）ditto. p. 679.
（註六）A. Labriala:―“Essays on the Materialistic Conception of History.” (tran. by Chrles H. Kerr.) pp. 109-113.
（註七）Marshall:―“Principles of Economics.” Sixth edition. p. 6（大塚金之助氏譯書、一三頁）
（註八）ditto. pp. 20-21.（譯書、四二頁）
（註九）Bernstein:― op. cit. p. XIV.

（未完）